

ハイデルベルク信仰問答より

問 21 真の信仰とは、何ですか。

答え それは、神が、この世でお示しになったことを、すべて真実であると受け入れる堅固な認識だけでなく（ヨハネ 17:3）、聖霊が福音を通して（ローマ 1:16、10:17）、私の中におこす（ローマ 4:13, 16、マタイ 16:15-17、Ⅱコリント 1:21-22）心からの信頼であります。それはほかの人々に対してだけではなく、私に対してもまた、キリストの救いのみ業のゆえに（ローマ 3:21-26）、ひたすら、全くの恵みによって、神の罪の赦し、永遠の義と救いを与えてくださった、ということでもあります。

問 23 から始まる使徒信条の解説に向けて、あと二問前置きがあります。問 21 では「**真の信仰とは何ですか**」という問いが発せられていますが、これは問 20 の答え「**真の信仰によって主と結びつき、主の恩恵をすべて受け入れる者のみが救われる**」を更に突っ込んだ質問です。前回学んだことを思い出していただきますと、自分のうちにある「信仰」と呼ぶものはまことに不確かであるけれど、そういう自分さえもお救いくださる神の真実に依り頼むことこそが信仰であると書かせていただきました。今日はそのことがより丁寧に説明されていきます。問 21 の回答には、信仰に含まれる三つの要素が描かれています。

- ①知る
- ②受け入れる
- ③信頼する

①知る

「**堅固な認識**」という固い表現が出てきましたが、これを「知る」と言い直してみましょう。人はまず福音を知識として知ることなしに、信仰に至ることはできません。神がこの世に対して、また人類に対して何をしてくださったのか、それは聖書の中で説明されています。よって、聖書を読まずに（あるいはその説き明かしを聞かずに）信仰に至るということはありません。人間同士の関係においても、本当に信頼できる相手であるかどうかは、その人の言葉と行為が一致しているかどうかを「知る」ところから始まります。聖書読者は、旧約で約束されていた救い主の到来、その方を通して与えられる罪の赦しが、まさに新約において、イエス・キリストを通して実現したことを、まず知識として知らなくてはなりません。それによって、神がすべてにおいて首尾一貫したお方であることを知るようになるのです。

②受け入れる

「**すべて真実であると受け入れる**」という表現もあります。ここで、聖書読者は信仰に入っていく次のステップに進むことになります。福音を知識として知っても、それを受け入れないということもよくあるのです。これは、ある商品を紹介され、その説明を受け、本当に自分の生活に

必要不可欠なものだと分かったけれども、やはり買うのはやめておこうとする態度と似ています。あるいは、スポーツ選手が優れたコーチと出会い、良い結果を出すためのメニューを示してもらい、その通りにやれば本当に良くなるということが理解できたとしても、実行しないのとも似ています。人はこのように、理解するところまではできても、実行に移すとなると、一枚乗り越えなくてはならない壁があるのです。その一步を踏み出すかどうかで自分の永遠の行き先が変わってくるとしたら、それは先延ばしにしてよい話ではありません。

③信頼する

「**心からの信頼**」という丁寧な表現が出てきました。信頼という漢字を分解すると「信じて頼る」となります。見えない神を信じて頼るということは、雲を掴むような話だと思われるかもしれませんが、これは、人が人を信頼することと似ていると同時に、少し違った側面も持ち合わせています。人が人を信頼するという場合、元々全く知らなかった者同士であるならば、本当に自分に対して誠実を尽くしてくれる相手かどうかを見ることによって信頼関係は構築されていきます。しかし、この信頼関係は、たった一つの不誠実によって壊れる可能性があり、人間同士の関係の（罪ゆえの）脆さとも言えます。

神と人との関係においても、聖書の神がどのような方であるかを元々知らなかった私たちが、出会いによって知るようになったわけですから、人との出会いと似た側面を持ちます。しかし、人と人との関係と異なる点は、私たちが知るようになる神が無限に誠実な方であるということが分かってくるころなのです。この方は絶対に自分を裏切らないばかりか、むしろ自分が多くの過失を犯して神を裏切するようなことをしても、その関係の回復を求め、赦し続けるお方であることを知るようになります。そのことは、イスラエルの度重なる背信を赦し続けた神、ご自分を裏切った弟子たちをもう一度弟子として召しに行かれたイエス・キリストにおいて表されています。

このように、信頼は知識から生まれ、知識が深まることによって信頼も増し加わります。しかし、最後に付け加えるならば、聖書知識と神への信頼を結びつける要となるものがあることを忘れてはなりません。それが「**聖霊**」です。「**聖霊が福音を通して、私の中におこす心からの信頼**」と言われています。どんなに独力で聖書を読んだとしても、聖霊の働きなくして人は信仰に至ることはできません。初めて聖書を読む人に聖霊が働かれるためには、その人のために背後で祈る人の存在が必要です。現在我が家の子どもたちも毎朝聖書を読んでいます、親はその子どもたちの心に聖霊が働いてくださることを祈ってあげる必要があるのです。

聖霊が臨むと、人は福音を「自分のもの」として受け入れることが促されます。そして、心が動かされ、信仰に至ります。「**ほかの人々に対してだけではなく、私に対してもまた**」という表現が出てきますが、ある解説者はこの「**私に対してもまた**」という部分がこの問答で一番大切だと言っています。なぜなら、福音は自分のものとならなければその人にとって何の価値もないからです。他のクリスチャンが信じて幸せであればそれでよいというのでは十分ではありません。自分もそれを信じたい、同じようにクリスチャンになりたいという願いと告白によって、福音は「私のもの」となる。そのようにして「**神の罪の赦し、永遠の義と救い**」が真にその人のものとなるのです。